

事前評価報告書

R3年8月25日(水)

研究種別	成長戦略研究	
研究課題名	データセンシングを活用したキュウリ養液栽培における増収技術の確立	
研究期間	R4年度 ~ R6年度	
	評価項目	評価点
1	研究の必要性	4.4
2	研究内容の新規性	4.0
3	研究目標、研究計画の妥当性	3.6
4	研究体制、研究予算の妥当性	3.6
	総合評点	3.9
[評価所見]		
<p>・山梨県の産地に適応したキュウリの養液栽培をICT機器を用いたセンシング技術により管理することで飛躍的な増収が期待され、さらに年間を通じた安定収入の実現に期待が寄せられる。これらの設備に掛かる費用対効果を算定し、現地や企業に導入できるレベルで技術開発されることを期待する。また、最適な養液を開発する等、本課題を遂行することで慣行の土耕栽培にも還元できる有効な情報が得られるものと思われることから汎用性を期待したい。</p> <p>・農業法人だけでなく一般生産者が導入可能になるような工夫も検討し、合わせてご提示頂きたいと感じた。</p> <p>・成果がよければ個人導入も期待できるが、費用的面の検証も必要になる。早期にマニュアルの策定をし、普及につなげて欲しい。</p> <p>・養液栽培において、生産性が向上し増収できればとても良いと思う。</p> <p>・データセンシングを利用した養液栽培の増収技術はこれからの栽培には必要な技術で、新規参入で新施設を作る企業のみではなく、この技術を既存の施設を利用している農家の圃場にも応用できるように期待する。</p>		

事前評価報告書

R3年8月25日(水)

研究種別	成長戦略研究	
研究課題名	根深ネギの安定的な周年出荷技術の確立	
研究期間	R4年度 ~ R6年度	
	評価項目	評価点
1	研究の必要性	3.8
2	研究内容の新規性	3.6
3	研究目標、研究計画の妥当性	3.4
4	研究体制、研究予算の妥当性	3.4
	総合評点	3.6
[評価所見]		
<p>・県内産地がなかった根深ネギの生産を、平坦地から高冷地に至るまでの標高差を利用して周年栽培しブランド化を図る試みは挑戦的である。想定される地域の生産者とも連携し、可能であれば研究期間中から現地での試験栽培などを始めることにより、産地形成の円滑な構築に繋がるものと思われる。</p> <p>・栽培モデルをしっかりと構築し、生産者へ提示できるようお願いしたい。</p> <p>・新規就農者は中山間から平坦地まで幅広くいるなかで、生産者の所得増大の足掛かりになることを期待できる。</p> <p>・県内でネギが周年栽培できれば生産者も安定できると思う。</p> <p>・ネギの県内産は市場であまり見かけなく、冬に直売所で見かけるくらいなので、周年出荷で産地を確立して、周年地産地消ができるように期待できる。</p>		

事前評価報告書

R3年8月25日(水)

研究種別	県単	
研究課題名	高冷地における夏秋パプリカの簡易雨除け栽培技術の確立	
研究期間	R4年度 ~ R6年度	
	評価項目	評価点
1	研究の必要性	3.5
2	研究内容の新規性	3.2
3	研究目標、研究計画の妥当性	3.1
4	研究体制、研究予算の妥当性	3.2
	総合評点	3.3
[評価所見]		
<p>・栄養価の高いパプリカの産地を県内、しかも高冷地に育成し、高齢者でも持続的生産が可能な栽培体系を開発する試みは持続的である。露地栽培であることから、施設栽培とは異なる病害虫の発生が想定される。また、限定される生産時期にパプリカの出荷価格が高まる工夫を検討する必要がある(他地域の施設栽培パプリカと差別化を図る)。</p> <p>・現場のニーズに対応した重要な研究だと思う。露地栽培の産化が可能になる栽培技術を確立し、生産者に広く普及できることを期待する。導入部分で、なぜパプリカの露地栽培が産地としてないのか、その点を明確にしてもらいたいと思った。</p> <p>・費用対効果や、普及性と収益性はどうなのかについて検討してほしい。</p> <p>・近年、パプリカの需要が高いので本取り組みは期待できると思う。</p> <p>・パプリカは人気の野菜なので、簡易雨よけハウスで高品質のものができれば高収益につながり、新たな露地パプリカの産地になれるので期待したい。</p>		

事前評価報告書

R3年8月25日(水)

研究種別	県単	
研究課題名	促成イチゴ栽培における炭疽病発生要因の解明と防除対策の確立	
研究期間	R4年度 ~ R6年度	
	評価項目	評価点
1	研究の必要性	3.6
2	研究内容の新規性	3.3
3	研究目標、研究計画の妥当性	3.2
4	研究体制、研究予算の妥当性	3.2
	総合評点	3.3
[評価所見]		
<p>・イチゴ炭疽病の総合防除体系の構築は、これまで県内で未着手であることから必要性は高い。イチゴを主力作物とする他県の防除実態や農水省発生予察事業で用いられるアルコール噴霧の炭疽病検定技術や発生調査基準なども参考にしながら、山梨県独自の防除体系の開発を期待したい。その為には、是非とも県外の他機関との連携も積極的に取り組むことを検討して頂きたい。</p> <p>・とても重要な研究だと思う。そのため、病害発生の実態をできれば県内マップにでも描いていただければありがたい。また、発生要因の解明をしっかりとお願いしたい。それを踏まえての対策技術になるかと思う。</p> <p>・県内栽培者は個人出荷(観光園やネット販売)が多いと思うが、トータル的な取組み(周年体系と品種選定・炭疽病・ハダニ防除)をすることで、JA出荷への誘導からなる出荷量の増加が期待できるとともに所得向上が可能になるかと思う。</p> <p>・イチゴ以外でも生産者は常に病害に悩まされている。本課題を解決し対策技術を確立してもらいたい。</p> <p>・炭疽病の対策試験は県内初という事なので、産地を守り拡大していくためにも必要な研究で期待している。</p>		

中間評価報告書

R3年8月25日(水)

研究種別	成長戦略研究	
研究課題名	有機質資材による持続可能な農業技術の確立	
研究期間	R2年度～R6年度（成長戦略はR2～R4）	
	評価項目	評価点
1	研究計画の進捗度	4.2
[評価所見]		
<p>・これまで、栽培時の慣習や生産者の勘に依存してきた有機質資材の利用法に科学のメスで切り込むことは、有機質資材の効果的利用法を開発する上で欠かせない。これまでに、牛糞堆肥でも種類により窒素成分が多様であること等を栽培実験で明らかにした。また、鶏糞堆肥の長期利用の見込みや有機質資材中の各種微生物も明らかにしてきた。本課題の核心に迫るバイオスティミュラントの性能評価も着実に実施し、さらに最終年度には土壌深度と有機質資材との関係調査を新たな検討項目として課題に加えた。これは当初計画を上回る進展が認められていることを示しており、本課題は計画以上に順調に推移していると評価される。</p> <p>・「研究のねらい」のスライドが抽象的で具体的な説明があると有難い。堆肥中の難分解性窒素とAD可溶性窒素の長期的動態を明らかにしていただきたい(どの程度、無機化してくるのかなど)。全体的に個々の研究間の繋がりが見えにくいので、全体として何を明らかにしたいのか明確に提示してほしい。とても重要な研究だと思う。特に窒素の動態は気になるところである。同時に有機農家が窒素だけを有機物で投入できる資材も見つけてほしい。本研究にとっても期待している。</p> <p>・同じ堆肥でも成分においては差があることが判明した。今後は品目において作用性がどの堆肥が適切なのか判明すると有機質資材を活用する生産者は増えると期待できる。</p> <p>・一農家として、色々な有機質資材があるが分からないことが多いので、良い資材を利用できる技術の確立をしてもらいたい。</p> <p>・有機質資材は経験と勘で施肥することが多いので、データ化することは今後役に立つ。牛糞堆肥でも物により、かなり違いが出てきているは面白い結果で今後も期待する。大根の奇形率のデータはほかの作物でも試験してみて、どの堆肥がどのくらいの量で奇形率が高いかなどは大変興味深い。</p>		

中間評価報告書

R3年8月25日(水)

研究種別	成長戦略研究	
研究課題名	夏秋トマトの簡易雨除け栽培における裂果抑制技術の確立	
研究期間	R2年度 ~ R4年度	
	評価項目	評価点
1	研究計画の進捗度	3.6
[評価所見]		
<p>・中山間地の雨よけ栽培で生産される「桃太郎」に発生する裂果を回避するため、日射量と勘水量の2点に着目した栽培試験を実施している。2020年度の場合内試験では、曇天で降水量が多い年であったため、目的の裂果の発生が限定的で、有効な試験データが得られていないようである。本年度は、なるべく自然環境の影響が反映されない条件設定で試験を実施してほしい。しかし、その様な中でも茎葉の繁茂程度が栽培のステージごとに異なる等の新たな問題点を発見できた。それらも解決しながら当初目標を達成するため、遮光素材、遮光方法、灌水方法等を工夫し最終年に有効な成果が得られることを期待したい。</p> <p>・昨年度得られた結果を見ると、裂果率に大きな差はないように感じた。収量や裂果率とともに土壌水分量や日射量のモニタリングもされていると思うので、それらのデータも提示していただけると有難い。</p> <p>・施設導入や品種も必要だが、通路にマルチを敷く、又は全面マルチなどの取組みを試験区として設けてみてはどうか。</p> <p>・生産者が試験しにくいことを、県の研究機関で実施することは良いと思う。</p> <p>・昨年もゲリラ豪雨や雨が多く、今年も8月に大雨が降ったりとなかなか大変な研究だと思うが、新たな問題も発見したりと、総合的には順調に研究成果がでていっているのではと思う。</p>		